

電子データを整理していたら、1996年の草稿、仮題「まち再生」震災記録の未定稿が出てきた。

1995年1月17日の大震災以降、私は長田の焼け野にいた。まもなく17年が経とうとしている。当時は震災の10年後を異口同音人びとは占っていた。その「10年後」ももうずっと"むかし"のことになってしまった。我が事に気を取られて忘れてはいけないことを、私自身忘れてしまっていることをこの未定稿を読んで気づかされた。最終章あたりが書けていないこと、草稿であっても今更手を加えることも出来ないなどはあるけれども、facebookというメディアに載せてみようと思う。

長田の「ある地区」の復興についてはおそらく唯一のルポだと思う。もしかしたら、未完成ではあるけれども貴重なドキュメントかもしれない。登場人物は実名で登場します。記録としての価値を担保しておきたいからです。これを読まれて、実名が不都合のときはお知らせください。

じつは、私はこれを"発見"してのち「最初の部分」は読みましたがそれ以降を読み直していません。私もひとりの読者として振り返ってみたいと思います。

では、以下これより当時の文章です。1996年7月以前に書かれたことが電子データではっきりしています。

ルポルタージュ

『まち再生』（仮題、章のタイトルも）

目次

プロローグ

第1章 大震災でまちが壊滅した

全市的な破壊状況を示す

第2章 都市計画に翻弄されてきたまち

大道の紹介と2号線問題

第3章 まち再生の主体はどこに

復興まちづくりの手法いろいろ解説

第4章 まちづくりの中で変わる人たち

C南その1、その他

第5章 共同再建をめざして

C南その2、その他

第6章 地域を守る闘い

C南その3、その他。地域とは何か。

第7章 まち再生は可能か

C南その4、その他。描けるまちづくり像。

第8章 住民討論「まち再生」

住民討論を収録

エピローグ

年表

あとがき

註(2012.12.30)

この「目次」は、「目次」そのものが"想定"であって、これから公開していくものとはかなり違っている。私自身が書くためのメモにしていたもののようなのです。したがって、「目次」ではありませんので悪しからずご諒承ください。ちなみに、最初の章は「はじめに」であり、「第1章」を欠いて「はじめに」の次は「第2章」となります。

註(2011.12.30)

「目次」に示されている「プロローグ」はありません。以下の「はじめに」から始まります。

はじめに

長屋を上積みへんか。
おもろいやん、積んでみようや。
木造で、そないなことができるか。
木造は、3階までやでえ。
下をコンクリートにしてやなあ、その上に積んだらどうや。
居合わせた年寄り連中10人ばかりは、大笑いをした。

地図上での神戸市域は、周辺都市を圧倒して広い。だが、そのほとんどは山地や田園であって、人口の密集地帯は、大阪湾と接する海岸線から、その後背地にあつて東西に延びる六甲南山麓に広がっている。その広さは、全市域の1割を超える程度である。この額のように狭い東西に、JR・阪急・阪神の鉄道が軌道を並べ、国道2号線・阪神高速道路がさらに平行して走る。

一方で、丘陵地や田園での宅地造成、あるいは海面埋め立てによる土地造成をほしいままにし、「神戸市株式会社」の異名も頂戴してしまっているが、そうした開発地域と区別して、先の1割程度の市域を市民は「旧市街地」と呼んでいる。「長田(ながた)区」は、この旧市街地に位置する。

「長田区大道(おおみち)通」は、市営地下鉄長田駅から西へ2分も歩けばたどりつく。新湊川を越せば大道通だが、その手前には、区役所があり、消防署があり、警察署がある。銀行・オフィスビルが建ち並ぶ中心街であることに気づく。第三セクターの神戸高速鉄道も地下を走っており、その西代駅から地上に出るとそこは大道通である。

こんなに交通至便なところでありながら、大道通周辺は、意外や平屋・二階建ての木造住宅が多い。その多くは、戦後まもなく建てられた急造「長屋」である。さらに、いわゆる文化住宅も多く、工場もデンと敷地を占有している。昼の日中(ひなか)から明かりを灯している居住環境にもかかわらず、交通の便利さと、住み慣れた街への愛着から、年寄りたちは長屋住まいから離れられないでいる。

マンションはイヤやでえ
息子のとこ行ったら、暗いもんな。

長屋だって暗い。なのに、コンクリート造りの共同住宅は、年寄りには暗く冷たいと映るようだ。それがなぜ、こんな議論をしているのかだが、立ち退きによって、新しい住まい方を求めるしかないところまで追いつめられているからだ。ここに、高速道路を機軸とする都市計画が立ち迫っていたのである。

もう10年ごとや。
最初は、神戸高速鉄道の地下鉄工事。
次は、西代駅の地下化で、また工事や。
そんで、今度は、阪神高速の神戸2号線やろ。
わやにしよるでえ。

(地元、世話役の話)

地元長老の小倉三郎が「ぼくが子ども頃でも、ああ、広がった」と目を細めて話したその"大道"は、昔、西国街道であった。明治になって兵庫電鉄(現在の山陽電鉄)が敷設され、以後、その鉄道が地下化になった現在の道幅は、なんと50メートルもの大幹線道路になっている。この大幹線は東西に流れる。道路の北側に接する人たちと、南側に接する人たちとは、当然"隣近所"とは成り得ない道幅でありながら、ここでは違っていた。同じ町内会なのだ。

つまり、大道通は、1丁目から5丁目まであり、そのうちの1丁目から4丁目までは、大幹線の南北にそれぞれ同じ丁目を有していた。とはいえ、真ん中にズドンと、大きな道路を通されているので、南北それぞれの"街"は、道路に面して帯のように残っているにすぎない。そこへ、残されたその北側をえぐり取るように、阪神高速道路2号線の延伸計画が持ち上がった。2号線は大道通2丁目付近で南に進路を取り、南側の大道通にも立ち退きを迫ってきた。

そんなんゼツタイ承知せえへん。
計画のある沿線の29ある自治会が集まってね、
大ハンタイをやったんです。

(地元、世話役の話)

市長名を名指して糾弾する大看板が掲げられた。裁判闘争も辞さずであった。が、やがて反対運動は収拾され、住環境の改善へと協議は進められるに至った。この中に1人の地元建築家がいた。愛称クマちゃんこと林英雄。彼は、建築学を専攻するために、信州から神戸の地に出てきた。その後、大道通で周旋屋の娘さんと出会ってしまい、以後、大道の人となってしまった。子ども会とかかわるなかで、自身も祭り御輿(みこし)をかついだ。それが縁で、自治会活動にかかわるようになった。

そこに住んでるから、分かる。
そんなふうに考えてもええんやないか。
長屋を、今ふうに設計してみたい。
(クマちゃんの話)

1996年1月17日未明に発生した阪神淡路大震災によって、50メートル道路の南北両側とも大火災になった。クマちゃんが住んでいた"4軒長屋"は焼けなかったが、全壊した。震災当日そして翌日、クマちゃんは、救助・避難所の確保などに奔走していた。破壊され焼き尽くされた光景を目の当たりにしながら、ある1つの言葉が彷彿と湧いてきたという。

「自立建築」
これまででは建物が人を守ってくれると思ってきたが、
そやなかった。
(クマちゃんの話)

震災後、大道通はその周辺地区も含め、復興拠点として重点地域の1つに指定された。震災から2か月余り経た3月27日、神戸市によって地元説明会が開催され、以後、復興への歩みが始められた。が、その舵取りは、海図無しの航海といえるものだった。

ねえ、△△さんは、どうしとん。
同じするんやったら、一緒にせえへん。
ちょっと、待ってみよう。
(のちに共同再建を実現させたある女性の話)

瓦礫を取り除くのに、皆のハンコがいるいうから集めに廻ったんやけど、
避難先をつかむのに、えろう苦労してなあ。
それがよかったんや。
まとまるきっかけになつてな。
(のちに共同再建を実現させたある男性の話)

この地域は、車道を境界線として17の街区に分けられ、記号ABC...と方位の組み合わせで、街区に固有の名称が与えられた。その1つである「C南街区」では、1年余の協議を経て住民主導の共同再建が実現した。敷地面積、約3600平方メートル。96年秋に着工、翌年12月入居となる予定である。

入居者は、震災前ここに住んでいた人たちだ。「もとの街に戻ろう」を合言葉に実現させたこの共同再建は、その規模と、かかわってきた人たちの多さなどで、全国に類を見ないものである。

そして、この建物の南向い50メートル道路をはさんで、クマちゃんの設計による自立建築「まーぶる・おおみち」の、その鉄骨が今では最上階まで組み上がっているところを見せてくれている。

大道通とその周辺は、この2つの建物を嚆矢(こうし)にして、まちづくりが沸騰している。性急な震災復興の中にあっても、住民自治を守ろうと懸命の努力が払われている。そうした人間模様と、ハード・ソフト両面を包含する自立建築論を本書で伝えることができればと願っている。

註(2012.1.1)

「第1章」はありません

第2章 「まーぶる」のある街

「まーぶる」の最上階、9階からは、北に六甲山系の山々が、南に大阪湾が眺め渡せる。神戸が住みやすいといわれる理由のひとつが、ここにある。

静かな夜更けならば、船の汽笛が聞こえてくる。海水浴のできる須磨海岸までは、電車で10分の近さだ。チャリンコ(自転車)で行くことだってできる。"昼アミ"で知られる近海の魚を、市場で買い求める楽しみもある。

ここらあたりでの六甲山系は、標高300メートルを前後にして美しい稜線を描いている。この高さでは"里山"である。そのひとつの峰・高取山(たかとりさん)は、まだ夜も明けきらない早朝から"毎日登山"の人たちで賑わう。窓を開放しておけば、昼は浜風が、夜は谷風が、家の中を吹き抜けてくれる。

高取山の登山道にはサクラがたくさん植樹されているため、一斉に咲く4月初めは、山肌がうすぼんやりと"桜色"になる。サクラと入れかわりにツツジが咲き乱れ、やがてニセアカシアが満開となり山肌が白っぽくなる。早朝のひとつときに自然とたわむれ、朝食をすませ、そして喧騒とした都市へ出勤と相成る。

「まーぶる」直下では、幅員50メートルの中央幹線が真っ先に見える。多くのクルマが東西それぞれに進路をとって流れてゆく。東西両方向で10車線。その地下では、山陽・阪急・阪神の各私鉄が相互乗り入れをして走っている。この軌道は、神戸高速鉄道が運営しているのだが、車両を持たない軌道だけの会社である。神戸高速鉄道の西代(にしだい)駅は、まーぶる直下より西へ200メートル余。逆方向、東へ500メートル余には、同鉄道の高速長田駅があり、神戸市営地下鉄の長田駅もある。その地上部では、南北の幹線道路が交叉し、人もクルマも、激しく行き交う。

「まーぶる・ペランダ側」に回って、つまり南側に目を移せば、景観は一変する。

■(小見出し) 職住近接の街

工場と長屋建てが渾然一体としている。いわゆる地場産業として位置づけられているケミカルシューズの加工所であったり、関連業種のゴム工場が、そして鉄工所などが密集しているのである。その隙間を長屋建ての塹(いらか)がうずめてゆく。戸建て・長屋建てを問わず、人の住処(すみか)であるはずの住居スペースを"工場"にあてがっている家も少なくない。ケミカルシューズのある工程を、それぞれの家内工場が受け持っているのだった。

だが、じつは、本稿を起こしている現在、まーぶるから眺められる景色は、まったく違ったものになっている。震災によって、これらの建物のほぼすべてが焼けたり倒壊したりで、一旦は更地となってしまった。その震災からまもなく1年半が経過した今、仮設の工場と仮設の住宅が、あるいは再建の住宅が混在する一方で、空き地はここかしこに点在している。とはいえ、住まい方も職業も変えられる人はわずかであって、再建あるいは仮設の住宅内では、再び家内工場が"稼働"しているのだろう。工程がきわめて多いケミカルシューズの製造は、地域一帯を工場群としてしまった。「職」に優位性をもたせた職住近接である。もしくは、職住一致でもある。

しかし、地場産業としてのケミカルシューズは、円高によって輸出競争力に打撃をこうむり、国内消費においてもヨーロッパの高級品と激しく競合するなど、その経営環境は厳しい。が、それでもなお業態を保っているわけは、職住近接による集積依存が可能だからだろう。

道路の歩道寄りには、駐車したまま、あるいは荷物の搬出入をするクルマが入れ代わり停車していて、日中はクルマが数珠つなぎだ。駐車場は少なく、荷捌き場も不十分なので、道路の占拠があたりまえのようになっている。盲人や車椅子利用者には、やさしい街とはいえない。公園は"緑"も少なく、煤(すす)けた工場と人家の密集地帯である。(震災前までは...)

■(小見出し) 長屋と下町とクマちゃん

「インナーシティーの活性化や、言うけど、なんやよう分からへん」と、池田南部自治会連合会の会長・伊藤一之は切り出した。郊外で発達し続ける新市街地に対して、都市内過疎と人口バランスを失いつつある旧市街地の再生を意味する都市計画事業であるらしいが、"下町"を"インナーシティー"と呼び換えて、また何か新しいコトでもするのかと思ったという。「ニュータウンとここいらを高速道路で結んで、活性化につなげるやて。分かる? そんなコト」「まちづくりやいうてやな、たまに大学の先生の話や聞かやないか。そしたら、すぐ下町はええいうやないか。いっぺん、聞いたるか。先生、"下町"って、なんです? きっと、よう答えへんで」と、伊藤は茶目っ気を出して笑った。

「ここらに"下町"という言葉は、なかったんと違うかな。東京の"山の手"に対する言葉で、だいぶ違うんとちゃう」とは、クマちゃんの言い分。

下町もインナーシティーも、ここに住む人たちが付けた言葉ではない。当の住民たちは、そうした言葉を押しつけて人情を美化したり"商品化"したりされることを胡散(うさん)臭いと思い、規格サイズの都市計画を押しつけられることに警戒心を露(あらわ)にしている。

インナーシティーとカタカナ語に置き換え、学者先生が良い処方を下してやろうと意図したのかもしれないが、一朝一夕に超過密地帯の住宅事情が解決されたり、産業構造の改善が図られるわけではない。処方には痛み

がともなう。

■(小見出し) 都市計画に翻弄されて

1968年4月に山陽電車の軌道は地下化されたが、それまでは長田交叉点で神戸の市電と山陽電車がダイヤモンド・クロスしていた。美しい緑色で人気が高かった神戸の市街電車が、あるいは山陽電車が、ガタンガタンと車体を揺るがして交叉点を横切る風情は鉄道ファンを魅了していた。山陽電車はその交叉点を過ぎると、終着の兵庫駅までは、もうすぐそこであった。(神戸市電は1971年に廃止された)

のどかともいえるこの光景は、1958年、神戸高速鉄道の工事開始とともに消え去る運命にあった。戦災復興による区画整理事業があわせて施行され、現在の幅員50メートルの道路が出来上がった。その幅員拡張の際に、旧道路北側の敷地関係者は、後退を余儀なくされた。その北側とは、大道通の人たちであった。工期10年の歳月は長かったが、便利になった交通を、それでも喜んだものだった。

それもつかのま、86年、そのときは、西代駅はまだ"地上駅"であったが、今度は西代駅が地下に潜る工事が始まった。それから、また10年。広いはずの道路の半分以上に工事囲いがされ、クルマの渋滞をひきおこしていた。大量の排気ガスが撒き散らされた。この工事は現在も継続中だが、まもなく終息の予定である。路線に抵触して営業する店は、売上げを大きく落とした。都市計画という行政権力には逆らえず、工事終了をひたすら待つしかなかった。

そこへ、またまた阪神高速道路2号線の工事が、これから始まろうとしている。その工事が終わるのは、10年後の予定。しかも、道路用地として、立ち退きも伴っていた。戦災復興で後退した人たちが、その後退した敷地をさらに立ち退けというものであった。激しい反対運動が起きたことはいうまでもない。

*

『阪神高速道路公団30年史』によれば、1969年10月、すでに<神戸市山手高速道路技術委員会が「高速道路神戸2号線の基本計画に関する答申書」を提出>とあり、かなり早くから計画に着手していたとみられる。それから3年後の1972年9月には、神戸市において都市計画決定がなされている。

■(小見出し) 都市計画とは何か!

そして、震災。この怒りと虚しさを表現したい。

長田神社と御輿。

註(2012.1.1) 上記2行は、ここに挿入しようとした私のメモ

大道通に限っていえば、コンクリート造りのマンション(アパート)は、ほんとうに少ない。1軒しかない。狭小な長屋や文化住宅、敷地15坪がせいぜいの戸建て住宅がほとんどなのに、繁華街に近いからか、住みやすい感のほうが強いのかもしれない。もっとも、若い人たちの定着は良いとはいえない。小学校も学年2クラスを維持するのがやっとのこと。クマちゃんにしてみても、今では、ここより東へ数キロ離れた場所に設計事務所を構えているが、3年前までは、自宅兼設計室だった。仕事に追われ、設計室を飛び出たら、施主との往復が普通で、さして近所づきあいが良かったというわけでもない。ただ、ここには10年来の立ち退き問題があり、町内会の役員としてそれにかかわり続けていた。

■(小見出し) 2号線問題の発端と経過

伊藤一之さんに2号線問題の発端と経過を語ってもらう。

10数年前(?)、高架で2号線が来た。

人は最初、どう寄ったか。

反対運動が、なぜ、まち協になったのか?

受け入れられなかった街区計画(受け皿住宅の建設)

まーぶる・おおみちの芽生え

註(2012.1.1) 上記6行は、私の取材メモ

伊藤一之は、単位自治会の連合会長だが、威張らない人だ。「大道通まちづくり協議会」の会長が、小倉一郎。伊藤も小倉も、この地に古くから住む長老である。互いに等しく、この震災で家を失っているながら、なおも住民の世話をやく立場にいる。いや、こんなときだからこそ、必要とされているのだろう。疲労の度合いも極限をとっくにすぎているのに、町内をどうするか、対策の毎日であった。

第3章 長屋暮らし風「まーぶる」

註(2012.1.1) 以下、取材メモ

「まーぶる・おおみち」は、震災のその年の秋に設計着手が予定されていたが、震災のために前倒しをして急いだ。を、イントロで使って、第2章とつなぐ。

震災前から入念に話し合われていた「下町」感覚に加えて、防災面が浮上、強化された。

そして、基本的な構成として、第1章の解説を、小見出しに対応させる形で、この章で行う。

従来の下町感覚を、マンション形式の住まい方にどこまで置き換えられるか？(近代長屋の試み)

そして、下町とは何なのか？下町礼讃で果たして良いのか？

既存の長屋を、あるいは下町の建築物を考察してみれば？

--- --- ここまで取材メモ(終)

以下、この章は、クマちゃん(林英雄)の話を建築家としてまとめてある。

■(小見出し) 年寄りの自立 人間の自立

トイレの手洗いは普通、タンクとセットになっているが、今回は壁掛け式をつけた。年寄りはお漏らしなどして汚すことがあるが、自分で処理をしていると手を汚しやすい。汚れたままでは服が直せない。用便をしたあと、手を洗ってから、服が直せる。という発想が出来ないのか。

こうするとトイレの部屋が非常に大きくなる。スペースがもったいないという話にもなるが、大きくなれば介護者も入れる。

行政と交渉して、ここにも補助が入った。

長田もそうですが、日本はこれから高齢化社会に入っていきます。

自分で生きていくということが大事になってくる。どこまでサポートできるか。建物として。寝たきりになるまでは、ここで住めるという考え方でトイレを作った。

お風呂は普通のユニットバスだが、いわゆる跨ぎ越し高さ、つまり浴槽の高さは50センチ以下にしてある。

椅子で湯を汲むと、椅子がすべりやすい。床にべったりお尻をつけて洗うとなれば、高すぎるとお湯が汲めない。50センチ以下にしておくとなってくる。

電化マンションのため、電気温水器が備え付けられている。

■(小見出し) 水の自立

停電時でも、300から400リットルの水がたまっている。

地震で建物がこけてしまったらどうしようもないのだが、断水状態が1週間くらい続いても、保存しておいた水は飲めた。だから、水は各戸で保管出来る。

■(小見出し) 電気を選択

震災で、街はガスで燃えた。ガスは絶対嫌だ。ガスが漏れればなしで、電気が復旧する、もしくは何かから引火して、ガスが爆発した。特に、このような鉄骨鉄筋コンクリートの建物になると密閉度が高いため、ガスを閉じ込めるので、爆弾をかかえているようなものになる。

電気代・ガス代と比較もしたが、安全側をとろうということになった。

キッチンには、電気レンジを設置している。電磁レンジではない。電磁は渦電流によるもので熱くはならないのだが、鍋をかけたら熱くなる。それだと赤い火が見えないから頼りないという素朴な意見によって、電気レンジの採用になった。

電気レンジは、ハロゲンヒータという効率の良い熱源があり、これは赤い火が見える。熱くなるので、かえって安全だ。調理方法には慣れが多少はあるかもしれない。

電気レンジは20数万円だが、ガスレンジは2~3万円。10倍もの差はある。関電の協力で、リース方式で導入できた。

台所は快適であろう。

電気の方が空気対流が発生しないので、部屋が汚れにくい。今の食生活はアブラを使う料理が増えていて、老若男女とも、ガスだと空気対流が大きいので、天井から壁からと汚れる。建設途中のため、実際のデータはないが、電気にして良かったかな？

年寄りが、ガスで着物のたもとを焼いてしまうとか、温度管理がラクだから、天ぷら油に火が入るという心配もない。年寄りの都市生活という観点から、電気の方が安全かなと考えられる。僕らも年寄りにいづれなるのだが、こういう点からも「住民の自立」が図られる。

■(小見出し) 共用廊下

玄関が飛び出した関係もあるが、廊下がデコボコしている。1階に自転車置き場はあるが、高価な自転車であったり、お年寄りさんのシルバーカー(手押し車)の置き場所を考慮した。

お年寄りさんがシルバーカーにつかまって、買い物に行く。

長田ってところは、おもしろい所で、サカナを買うにもいろいろなランクがある。「今日は、お金があるから、ほなあ 活けもん屋に行こうか」 活けもんというのは、神戸・明石の屋網であげてきたサカナつまりトレトレのサカナ。ちょっとお金が無いときは、トロもん屋といって、トロール船で獲ってきた遠洋漁業つまり冷凍物になり、それからもうちょっとお金がない、給料前ということになると、スーパーのパック物のサカナと、選択の自由度が高い。

お年寄りさんが、あちこち市場にいったりスーパーに行ったりするときに、シルバーカーにつかまっていく。買い物ですから、自転車置き場に置いておけない。「買い物袋をさげて、手摺りにつかまりながら階段を歩くなんでけへん」 いきおい家の前までシルバーカーを押していけないか。つまり廊下に置いておくしかない。どこか広い所を作ってくれないか。それで、図に示すように、置けることを考慮した。町内会の長老とかおばちゃんたちと話し合いながら発想してきたので、このように建築に反映されている。

■(小見出し) 裏路地・裏路地

長屋感覚で住める。

長屋感覚で住めるということは、マンションというのではなく、今まで長屋で住んできた下町の生活が継続しやすい。

今、わたしたちのめざしているまちづくりは、単に住宅戸数を作ればいいというのではなくて、隣のAさん、隣のBさん・Cさんがそのまま帰ってくる街ということじゃないと、街ではない。

たとえば、長屋が4軒あったら、そのまま住めるとは限らないが、Aさん・Bさんが一緒に住んでいて、裏路地から回れる。

もしくは、僕の息子夫婦が住んでいて、その隣に僕たちが住むこともできる。街の生活というのは、人間個人ではなく、からみあい、関係性の中で街が出来ている。

それが、震災で助け合いを呼び、食料を分け合い、ということにつながった。

一方、神戸市がやったことに、仮設住宅で弱者優先ということで年寄りを先に入れた。一番弱いお年寄りが帰って来れない。現代版の姥捨て山になっているといっても言い過ぎではないだろう。

それを救うためには、年寄りだけではなくて、若者夫婦、もしくは中年夫婦まあ僕らみたいな奴も一緒に住んでこそ街ではないか。

それが出来る建物、出来るまちづくりを今からしていかななくてはいけない。その生活を守るためには、建築の方でどれだけのがハードウェアとしてサポートできるか、このことをまーぶるで試みた。

今年中にはまーぶるが建つので、32戸の人は帰って来れる。

註(2012.1.1)

「第4章」はありません

第5章 震災復興とまちづくり

「おやじさん、無理ゆうても、ええか？ 公会堂が欲しいねん。一千万円、出してえ！」
クマちゃんもこの時ばかりは、すぎるしかなかった。それは、小倉三郎にとっても渡りに舟だった。
—あの人も死んだ、ああ、あの人も死んだ。みんな、知っとる人ばっかしやろ。自分は助かっとる。気の毒でなあ。どないかあして、はよう慰霊祭がしたかった。
震災のその朝、洗面所に立っていると激しい揺れが襲ってきた。洗面台にしがみつき、必死でこらえていた。その位置から見える窓越しに「二階建ての屋根が落ちてきた。アツと言う間やったなあ。一階を押し潰してしまおうて。これは大変なことになった」とあわてて家を飛び出した。「外へ出たら大勢の人で、若いモンが、靴下のままやないか言うて靴くれて、シャツのままやないか言うて上着くれて、ズボンくれてなあ。荷物は、なあんも出せへんかった。いつやったか、よう思い出せんが、1週間ぐらいした頃かなあ、慰霊祭をせなあかんと思つて。なんぼかかってもええ。面倒みたるから、そう言いました」

な、まちづくりって、なんや。
2メートルの路地を残しといてやな、
自分は公道に面しとるからゆうてやな、
まあ、建てられるやないか。
生活がかかっとオさかいに、まあ、ええとせんかい。
そしてやな、
あとになって、後ろの路地のモンが建てようとしたら、
えっ、どうなる？ 建たへんやろ。
こんなん、自治会が面倒みれるか？
えっ、まちづくりって、なんや？

註(2012.1.1) 以下、取材メモ

大道周辺地区その全地域を見渡した小ルポ。
「まーぶる」をこの地域から切り離しては存在し得ない。
そして、第6章以降のC南街区共同化も同様である。
苦渋難航その様を、可能な限り醜態も表現したい。
その中でも、一縷の望みをどのように託そうとしているのか、
そしてそれが今も今後にも継続中である進行形として表現しておく。
巷でいわれるような"美しい神戸をもう一度"は、誰かが勝手に作り上げた虚構にすぎない。
長田の地場産業といわれるケミカルシューズは、震災とは関係なく衰退を辿っている。それを直視するような視座が必要。
地域のコミュニティをいかにして守ればよいのか！
そして、再び、若者と年寄りが共に住む街は再生されるか？
市営住宅の計画は、ぜひ公表したい。
3月26日、長田区役所での地元説明会を皮切りに
公会堂と小倉三郎

第6章 C南街区 その1 — 共同再建は可能か

「……ということで、作業部会に入っただけの方、手を挙げていただけませんか」と、岩崎俊延は促した。即座に、4人の手が上がった。柴田誠一・坂本勝秀・藤田俊次・今滝一恵。柴田は、手を挙げながら「作業部会って、なにすんねん」と言い、照れを隠した。遅れて、金田百合子も手を挙げた。作業部会は、この5人で始まった。1995年5月27日のことである。震災から4か月あまり経過していた。

5人は〈C南〉街区に住んでいた。C南街区は、1辺を約100メートルとするほぼ正方形の広さがあり、東西と北側は8メートル道路に、南側は50メートル道路に接する。震災によって、わずか1棟を残し、他はすべて大火に呑み込まれてしまった。焼けただれた瓦礫は片づけられることなく放置されたままであったし、焦げついた匂いは消えることなく、恐怖を呼び覚ますのに十分だった。

3月26日、C南街区を含めたこの地域全体の、市当局による説明会が行われてのち、C南街区だけの集会在次のように開催された。

3月28日(火)・第1回

4月30日(日)・第2回

5月5日(祝)・第3回

13日(土)・第4回

27日(土)・第5回(作業部会が提案され、発足する)

*

当地は2号線問題があったため、震災前から、市当局と折衝中であつたと、前章でもふれた。そのために、まちづくりの住民組織である〈大道通まちづくり協議会〉は既存であつたし、折衝のお相手・市当局〈都市高速道推進室〉主査の橋田好正とは顔見知りであつた。また、この都市計画については、コンサルタント役として〈都市・計画・設計研究所〉もかわり、岩崎俊延が担当していた。

震災後は、〈重点復興地域〉として地域指定され、その対応窓口を市当局より示されたが、橋田は"統投"になった。

〈大道通まちづくり協議会〉の対象エリアは、2号線問題に抵触する50メートル道路沿いの文字通り〈大道通〉街区だけだったものが、震災後の地域指定は周辺街区をとりこみ、面積は一気に約3倍となった。復興への調整は、これも引き続き〈都市・計画・設計研究所〉つまり岩崎になった。〈都市・計画・設計研究所〉は、略称の〈ウル(UR)〉と呼ばれている。

C南街区の集会において、毎回、橋田と岩崎は簡単な自己紹介を加えて挨拶をした。

「えーっ、このたび、この地区のお世話をさせていただくことになりました都市・計画・設計研究所の岩崎と申します。都市・計画・設計研究所のほうは、長い名前ですので、ふつうはウルと呼ばれています。よろしくお願ひします」

「えーっ、神戸市の都市高速道推進室の橋田です。以前より、2号線問題ではお世話になっていますが、震災復興についても引き続き担当させていただくことになりました。よろしく」と、随行している同僚も紹介する。

しかし、住民には、岩崎と橋田の職務上の区別がつかない。どちらも市の担当者と思ひこみ、相談したり陳情したりだが、ときには悪口雑言をあびせる。

*

第一、市当局の説明語句が難解で分かりにくい。

〈重点復興地域〉に指定されると説明されれば、他の被災地区と比較して重点的に復興される地域に優先されたと理解してしまう。が、違う。〈神戸市震災復興緊急整備条例〉によって市が緊急整備する区域を指定しているが、その指定区域名称に〈復興促進地域〉と〈重点復興地域〉の2つがある。つまり、法的用語である。〈復興促進地域〉は約5887ヘクタールもあり、旧市街地のほとんどがこれに含まれている。その区域内の、とりわけ被害が集中している地域に〈重点復興地域〉の指定が適用されるのだが、この指定を受けなかった地域の被害が軽いというのでは、決してない。

「市営住宅を建てる計画は」と急ぎ立てる住民に対して、市当局は「市営住宅を建てるための土地が必要ですよ」と答え、「みなさんの土地に、勝手に市が建てるわけにいかないでしょう」ともつけくわえた。

〈区画整理事業〉や〈都市再開発事業〉であるならば、市に用地取得の道が拓け、市営住宅も建つ。しかし、〈重点復興地域〉の指定を受けたからといってそこには、市が牽引していくほどの計画事業は一切なく、住民の理解と協力がなければ、何も出来ないに等しい。こうした区画整理事業などの違いを理解する必要があつたのだが、ぬぐえない震災の恐怖と、募らせた市への不信から、事業への理解は程遠いものだった。

(住民)「土地を提供してもいい、と、市役所まで行ってゆうたですよ。なんも返事くれません。どうなつとんですか」

(橋田)「そんな個別に買って、後で周りに家が建ち、けっきょくその土地が使えなかつたらどうするんですか。ある程度、見通しをつけんかね」

(岩崎)「成るか成らんかは別にして、どうやったら前に住んでた人が再び住めるようになるのか、みなさんでいっぺん話し合ってみましょう」

岩崎は、火消し役もし、提案もした。

*

〈ジュウシソウ〉という言葉もしばしば使われるが、難しい。〈住宅市街地総合整備事業〉を略して〈住市

総)となる。疲弊した市街地を再生させる建設省の助成事業で、住宅や公共施設の整備が主な対象となっている。当地は、この事業の対象にも指定された。その正式な事業名称は〈神戸市震災復興地区新長田住宅市街地総合整備事業大道周辺工区〉。まあ、これは書面でしかお目にかからないが、役所アレルギーにならないほうがおかしい代物である。

国が用意した基準を満たせば、それ相応の補助金を拠出してくれる。その詳細もまた複雑だが、これはウルなどのコンサルタントに相談すれば解決するし、そのほうが賢明だろう。要は、何人かで共同して住宅を建設すればよい。その建築が良質で、建築主の戸数を上回って余剰戸数を生みだせば、補助の対象と成り得る。

*

〈共同化〉〈協調化〉による住宅建設も積極的に呼びかけられたが、この2者の違いは何か。一々説明を求めなければ分からない。いずれも税金による補助がつくため、これも法的用語。「互いに協力しあって」のような文学的表現ではない。

3軒以上が敷地を1つにして建築するのが〈共同化〉で建築後、区分所有することになるもの。一定の敷地面積を超えかつ余剰戸数を生みだしていれば、〈住市総〉の対象にもなる。

〈協調化〉は、隣り合う家の壁などを共有することにより、敷地をより有効に生かそうというもの。狭い敷地の有効利用となるが、〈まちづくり〉として都市の空間を生みださせようという意味合いのほうが主目的。

ほかにも〈従前居住者〉〈事業用...〉など、理解しておかないと復興計画を立案していく主体者になりきれない。住む家が現にあるならば、都市再生のために、5年・10年とかけてでも計画の立て様があるだろう。しかし、ここは震災地。1日でも早く住める家が欲しいのに、なんともどかしいことか。

■(小見出し)名簿を作ることから

C南街区に住んでいた人は、何人だったのだろうか。関係者の間で、ゼンリンの住宅地図が頻繁に利用された。戸建てはもちろん、アパートに住んでいた人たちの名前も、この地図で拾える。地図に記載があっても、もう何年も前から住んでないという人もいたが、数え上げると180人を超える。焼失しているので、ここには居ない。どこに居るのか。

公会堂に、模造紙を2枚重ねた程度に拡大された地図が掲示された。避難先や連絡先がわかった人の家が塗りつぶされていった。その掲示板でも呼びかけていたが、お互いに連絡をとりあい"行方不明者"の発見がさしあたりの作業になっていた。

『大道周辺地区復興まちづくり新聞』の第1号が、3月27日付で発行された。発行は「復興まちづくり新聞編集局」となっているが、影の制作者はウル。

第2号・3月30日付

第3号・4月15日付

その3号とも、連絡名簿の作成を呼びかけていた。

『新聞』を送付するとき、まずは、避難所や避難先が分かれば、それを宛先にした。分からないときは、やむを得ず震災前の住所を封筒に書いた。当然、そこには家が無い。郵便局の努力に頼むしかなかった。大方はいずれ判明するものの、後述する〈従前居住者〉の意思を確かめる必要があり、連絡先確認は徹底を期された。次に掲げる文書は、「転居先不明で配達できません」の印が押された返送郵便物に添えられていた。被災地における郵便局(員)の苦勞が偲ばれる。

*

平成7年7月31日

復興まちづくり相談所様

長田郵便局長

拝啓 猛暑の候 あなたさまにはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。平素は、郵便局をご利用いただき誠にありがとうございます。厚くお礼申し上げます。

さて、長田郵便局では大震災後、郵便物の配達に大変支障をきたしております。同封の郵便物につきまして、受取人様が避難先をご指定されていますが、配達に伺いまして受取人様が特定できないため、止むなく郵便局に留め置いていました。

その後再三配達を試みましたが、配達がかなわず、これ以上留め置くことは差出人様にご迷惑をおかけすると判断し、お返しすることと致しました。

本来ならば、配達ができないと判断した場合、正規な扱いをするものですが、震災後の非常時を考慮致しますと、何としても配達をいたしたく本日の処理となった次第です。

ご返送が大変遅くなり誠に申し訳ありません。

今後につきましては、すみやかに対処いたしますので、変わらぬ郵便のご利用をよろしくお願い申し上げます。

まずはお詫び方々この間の事情をご報告申し上げます。敬具

■(小見出し)共同化への歩みだし

それでも、集会には2、30人の人たちが寄ってきた。女性が圧倒的に多い。散り散りになっているものだから、久しぶりに出会った人も多く、近況や噂話でいとまがない。

公会堂の壁面には、掲示物が何枚も貼られていた。建蔽(けんぺい)率・容積率・高さ制限・防火地区など、建

物を建築する際の規則や制限を告示したもの。単刀直入にいうならば、建築基準法のそれを解説したものであった。

「建築しようとする建物は、幅が4メートルの道路に、2メートル以上接していることが条件です」と、岩崎は、掲示物を示しながら解説した。「みなさんの地区では、まわりの公道に面しているお家(うち)はこの条件を満たしているのですが、路地は2メートル半程度ですから、これでは建てられません」「調べてみないと実際のところはわかりませんが、建てられる条件にするには、路地になっている道路の中央からお互い2メートルずつさがって建てることとなります。これをセットバックなんていいますけど」(白板に絵を描きながら)「そして、こんなふうに住建てる敷地が少なくなります。建蔽(けんぺい)率は敷地の、セットバックしてからの敷地の60%です。お互い壁をひっつけては建てられません。これも互いに境界より50センチはあけなければなりません」

岩崎は、なるべく易しい言葉で説明しようとしていた。聴衆の顔は当然ながら冴えない。昼に腰を下ろし、見上げて説明を聴いている。震災で家が倒れている様を数限りなく目撃しているだけに、眼差しは真剣であった。もうこんな恐ろしい所に住みたくないという思いと、ここしか生まれへんという気持ちが交錯しているようでもあった。

拡大した街区地図の前に、岩崎は立った。「人の土地に勝手に線は引けませんけど、まあ、たとえばのことで、……」と断りをいれ、「この路地をつぶして、これだけを1つの敷地として考えます」と、路地を間にして向き合っている十数軒分を囲い込むように、方形の線を描いた。「共同化という方法で、この中に共同住宅を建てることができます。そうすることで、敷地が狭くて家が建てられない人も、これで住宅が確保できるようになります」

いきなり共同住宅と提案されても、聴衆は想像してみるだけの拠り所がない。壁面には、どこかの事例なのか、美しすぎる"絵"が貼られていたが、瓦礫の街を背景にしては、とても重ね合わせられるものでなかった。しかし、誰ともなく声が上がった。「共同化したらどうなるのか、もう少し具体的になりませんか？」

*

5月5日、3回目の集会で、岩崎は共同住宅の模型を用意してきた。模型のそれは、青い硬質の発砲スチロールで作られていた。すでに何層かに住居は積まれ、傾斜をとった屋根や塔屋があり、洒落たゲートまで用意されていた。C南街区を3つのブロックに分けた場合を想定して、高層タイプ・低層タイプ・階層の積み上げ方をアレンジしたタイプと念が入っていた。しかも、拡大された街区地図にピタシと合う大きさに作られていて、これならば臨場感がともなう。この日も前回と同様、3つのグループに分かれ、それぞれ模型を囲みながら意見を交換しあった。

共同化は難しい。地主・家主・借り主、それぞれの思惑(おもわく)がからみあうなかで、共同化までの意思統一には数々の問題を解決していかなばならない。が、双六(すごろく)にたとえてみれば、ふりだしてみなければゴールに辿り着けない。C南街区の集まりで、まさにふりだしから歩みだそうとする呼吸を、岩崎は感じとっていた。

*

4回目の集会は、5月13日。もうだいぶん日が長くなった。土曜日の夕方5時が集まる時刻だったが、外は真昼のように明るい。暖かくなって気候的には良くなったものの、ビルや家屋の取り壊しがそこかしこで行われていて、空気が悪い。

「前回のおさらいをしておきます」と、岩崎は経過を説明した。それは、いつもその日が初めてという出席者がいるためだが、毎回出席している者にとっても、たやすいとはいえない用語が多いだけに、学習効果は大きい。

この日は、いよいよ第1回目の意向確認調査を行う作業にとりかかった。「復興まちづくり連絡票」の配布方法を巡って相談がなされ、その日のうちに配布が始まった。

*

5回目の集会は、5月27日。C南街区の集会日程はハイペースだった。そして早くも、「復興まちづくり連絡票」の集計結果が披露された。街区全世帯の、3分の1程度の回収率でしかなかったが、「震災前に住んでいたところに住みたい」は4分の3に達していた。意向確認調査を手分けして住民みずから実行してきた連帯感や、震災前のように足繁く顔を合わせるようになり、まちづくりについて多くを語るようになってきた。また、岩崎のようなまちづくりコンサルタントや市当局との問答にも要領を得るようになってきていた。しかし、その一方で、共同化なんていつのことか、待ってられん、との声も聞こえてきた。

今や、サイコロを一振りも二振りもしなくてはならない。そのサイコロは、岩崎が振るのでなく、市当局が振るのではない。住民みずからが振らねばならない。「……ということで、作業部会に入っただけの方、手を挙げていただけませんか」と、岩崎が問うたのは、このときだった。

■(小見出し) 柴田誠一が語る

C南街区の50メートル道路に面しているその中程で、ラーメン屋をしていた。屋号は「大道園」。住まいは、C南街区の中央部にあり、2階建ての木造だった。

大地震のあった早朝、柴田は1階で寝ていた。2階が1階を押し潰す形になり、妻とともに閉じこめられてしまった。濃いホコリが充満し、息がしにくい。こげくさい匂いもする。シーンとして不気味なほどに静かだった。そこへサイレンの音が聞こえてきた。人が通る気配がしたので、「助けてくれー」と声を出したが、何もなかった。3人目の人に声が届いた。「どこや」「のこぎり」という外の声が聞こえる。助け出されたのは、朝8

時ごろだっただろうか。

路地から公道に出られるはずの所は、家がバツリ倒れて通れない。裏道もほとんどふさがっていたが、わずかに抜け出られるほどのすきまがあった。隣の家が気になった。「山口は大丈夫か!」「まだや」そして、そのまた隣も。助け出すのに精一杯。ホツとしたら、さぶかったなあ。そのときは、まだ燃えてなかったんや。昼もまわって3時半頃、火の手が伸びてきた。家も店も焼けた。

「シバタさん、あんた、ようさん絵を持っとったやろうに... 上手に描いとったのに、ぜーんぶ焼けたんかあ」百枚近いその絵は、すべて焼けてしまった。「絵も惜しいけど、道具が惜しいなあ」アトリエとして、2年前に2階を増築したばかりだった。ラーメン屋をしながら、絵を描いていた。としておきたいが、柴田の経歴には惹かれる。その一部始終をつまびらかにすることは本雷の目的外なので差し控えるが、ラーメン屋として修業を積んだ経歴はなく、味は食べまわって考えたという。ラーメン屋の前は、釣り具屋。その前は、釣り具製造会社の営業マン。その前は...。もう控えておこう。"浮き"に精密な絵をほどこし、店に飾っておいたら売って欲しいと頼まれたそう。では、絵はどこで覚えたのか。これも、自己流だそう。

4月に入って瓦礫を片づけようという段取りになった。同じするんやったら、隣保一緒にしようとはよかったが、罹災証明と評価証明を1人も欠けることなく用意しないと、これが出来ない。表札にあがっていた名前と、役所に届けている名前が違う人がいて、同一人物とわかるまで往生してなあ。瓦礫を片付けたらきれになったゆうて喜んでもうて、このことで隣保がまとまるようになったと思う。

ウルの人の説明を聴いていると、18坪の敷地やったら、1メートル下がって、しかも建蔽(けんぺい)率60%やいうたら、建坪8坪か9坪しかにならへん。それで、共同化のことも考えてみようと思いましたなあ。

還暦を超えているとは思えない澁刺ぶりに驚くこと多々。自分の求める道のためには、いつでもスタートを切ってきた数々の経験が、今この震災の非常時で真価をみせているのかもしれない。

■(小見出し) 今滝一恵が語る

もうそれは、ダンプがつつこんできたと思ったもん。足が梁(はり)に挟まれて動かれへんのよ。どうしようかと思って... なんにも持ち出せなかった。全部、焼けたわ。

今滝は、50メートル道路沿いのアパートの1階をミシン場にし、そこで寝泊まりすることが多かった。夜中でも大型車が頻繁に通る、そのたびにアパートは揺れていた。いつかは...とっていたのは、地震ではなく、クルマの突入であった。

柴田と軒を並べる所に、姉妹で住んでいた"実家"も焼失した。大切にしていた衣服類のすべてを失い、自嘲気味に笑ってはみせるものの、悔しさも隠さない。

焼け跡でカナヅチだけを拾ってね。娘が、おかあちゃん、もう1回仕事しよっていうとんやないかアって... 2月になってすぐにミシン屋に電話をいれたけど、なかなか無くてね。銀行へ借金の相談に行かなあかんわ、なんとか機械を確保せなあかんわと、走りまわってました。3月の初め、こんなふうにと仕事ができるようになりました。早かったでしょう。

うちには、お地蔵さんが2体あったんです。そのうち1体は、バラバラになってしもうて... かわいそうだから、お寺で祀ってもらってます。地蔵盆をしたら、子どもが出てこようんやろか。わあっと出てくるような気がするねん。みんなが寄って、まちづくりを考えないかんと思うし... ここに戻ってこんと、考えられへんやん。1つドアを開けたら、またドアがあるかもしれへんけど... やるしかないもんね。

■(小見出し) 作業部会

柴田・今滝ら"作業部会"の人たちは、手を挙げてから1週間後の6月3日に初会合をもった。公会堂も仮設の建物ではあるが、その北側に隣接しているログハウスの〈復興まちづくり相談所〉を、この日初めて使うことになった。徳島県の三好林業センターから寄贈を受けたミニハウスで、先日建てられたばかりだった。

同じ街区に住んでいたとはいえ、親しさにも色々あるようで、会合の初めは簡単な自己紹介をした。そこに、もう1人のシバタさんが現れた。柴田彰信が作業部会の世話役を引き受けるという。歓迎されたことはいうまでもないが、シバタが2人になったので、どう呼ぶかが"議論"になった。年長の彰信さんを"大(おお)柴田さん"と呼ぶことで決着をみたのだった。

6人になった世話役たち、ウルの岩崎と山内徹郎、市当局は村上義幸、そして地元の相談役であり建築家でもあるクマちゃんが寄った。囲んでいるテーブルは満席状態。岩崎の司会兼進行役で、会議は運ばれた。テーブルには、例の模型が置かれ、あとから到着した「連絡票」も数通積まれていた。元の街に戻って住みたいという意向は、ほぼ了解事項に達していた。ところで、分譲やったら値段はいくらになるのか? 家賃はなんぼ出したら入れるのか? その見極めをつけないと、話もできん。当初は、そんな空気であった。

「数字を言うのは、なるだけ控えたいのです。数字は一人歩きしていきますから...」と岩崎は質問に答えた。

「どれほどの敷地がとれるか、容積率はどれくらいまで可能か、部屋の取り方をどうするか、それらの条件が決まらなないと、価格の計算はできませんし...」しかし、全体集会でもそうであったし、以後の作業部会でも、この課題は繰り返し問われた。更地に建つ新築が安かろうとは到底思えなかった。「結局は"金"や。それが分からんと安心できんや」と漏らす世話役がいるなかで、コンサルタントも市当局も同様に分かっているものの、立場の違いはときに不快感を誘った。

*

全体集会 10日(土)

6月10日、第6回目の全体集会がもたれた。内容は前回とほぼ同じで、「連絡票」の集計結果と共同再建を想定した場合の説明であった。意向確認に念をいれている様子を不愉快に思ったのだろう。「こんなもん、いつまでたっても建つかい!」と、やじが飛んだ。加えて、個人的に相談をもちかけているにもかかわらず一向に進展しない市当局にもかみついた。

会議が終わってからも、別の男性が、「もう待った。十分に待った。はようしてくれな、困るんや」と橋田ににじり寄った。「もうちょっと待ってください。なんとかさせていただきます」と返事をしてやっと逃れたが、こうしたことも再々であった。橋田の担当地域はC南街区だけではない。どこもが急を要する課題に加えて難問山積。とうてい捌けるものではなかったであろう。ただ「出来ません」と言わなかったにすぎない。

ある街区を想定して、ここではC南街区になるのだが、その地域内の住民がすべて共同化に参画するとは考えにくい。こうした抗議は、「参加しない」という表現形式の1つといえる。一刻も早く住宅を確保したい。個々の理由を問わずとも、その心情は共同化をめざす人にも共通している。それが分かるだけに、抗議の時間が通り過ぎていくのをじっと見守っていた。

■(小見出し) 準備会の発足に向けて

作業部会のテーマは、連絡先名簿の作成と、共同化への意向固めの2つにあった。

作業部会 6月15日(木)・第2回目
18日(日)・第3回目
22日(木)・第4回目(意向調査書の配布)
7月13日(木)・第5回目
全体集会 15日(土)

作業部会が設けられ世話役が活動するようになって、連絡先不明者の確認が急速に進んだ。「復興まちづくりアンケート」と称する2回目の意向確認調査を6月22日に配布した結果、街区全世帯の約8割の意向を確認できるようになった。ただし、ここでいう意向とは暫定的なものである。「どう住むか」は、これから討議されるのである。また、意向調査の2回目からは、街区西北部の一部を対象より外すこととされた。その理由は、共同再建よりも個別再建を希望している割合が高く、意向調査による無用な衝突を回避したい配慮が働いたからである。

同じC南街区であっても共同化とは一線を画して、市当局と折衝を進めている人たちもいた。遅い共同再建よりも早い個別再建を選択しようとしていたのだった。そこへ、C南街区の共同化が急遽 具体性を帯びてきた。

作業部会の世話役・コンサルタント・市当局の3者は情報を交換しあい、また討論を重ね、共同化の範囲を特定していく作業に入っていた。その結果、C南街区を、当面、3つのブロックに分けた。

- ① 東ブロック
- ② 高速2号線ブロック
- ③ 西北ブロック

*

さて、双六のサイコロは、誰がふるのか。今までは、岩崎がふってきた。それは、やむを得ずのことだった。サイコロの目で一喜一憂するのは誰か。「こんどは、お客さんやのうて、みんなのほうを向いて座りませんか」

明後日(あさって)に迫ってきた全体集会を前にして、岩崎は、最後のサイコロをふった。

その言葉をかける前に、もう1つ重要な投げかけを、岩崎はしていた。「隣のB南では勉強会を続けてられるんやけど、C南街区も〈まちづくり〉のための協議会を作ったらどうでしょう? ただ、一気に協議会やのうて、とりあえずその準備会を作られてはどうでしょうか」(6月18日)

第7章 C南街区 その2 —協議また協議

2つ連らねた長机を境にして、柴田・藤田・今滝・坂本・金田・大柴田の6人がこの順に座り、柴田が立ち上がった。「作業部会でお世話させていただいているシバタです。遠い所からわざわざおいでくださってありがとうございます。始めに、ウルさんから、アンケートの集計結果について説明していただきます。ウルさん、お願いします」マイクは無かった。地声で挨拶する柴田は、やや緊張していた。夕方の5時過ぎ。参加者は30人を超えたぐらいであった。

アンケートの集計結果と説明は、こちらも若い山内が引き受けていた。その説明を受け、次月に予定されている全体集会で、「準備会発足」を議題にすることが提案され、承認された。その根拠は、大多数の人たちが、もと住んでいた場所にもう一度戻って住みたいことが明らかになり、それをめざそうというものだった。共同化は常に話題の中心テーマではあったが、それはまだ“思い”の域にとどまっていた。

*

集会后、世話役たちはその場に居残り、次の打ち合わせを行った。準備会にするには、地主にも役員に入ってもらおうと意見が出たり、それは急には難しいとか... それならば、地主ごとに借地人代表を選び準備会の役員をお願いしようということになった。街区地図を細かく検討し、どの隣保からも欠けることのないように配慮された。自治の精神というのだろうか、いざサイコロを握ってからは、急速にメンバーがにぎやかになった。森康幸・小林恵美子・今中巖・鈴木勇・宮前立男・中西淳一・坂本博司らが加わり、まちづくり相談所は、ますます狭くなった。

作業部会	7月22日(土)・最終
準備会の発起人会	30日(日)・第1回目
	8月8日(火)・第2回目
準備会・総会	19日(土)・準備会発足

会議の消化は相変わらず早かった。

「発起人に地主さんが入ってないと、みんな、安心せえへんのとちがうかな」と、新しいメンバーの1人が発言した。「わたしら借地人だけでやってもええんやろか」

(ウル)「地主さんにも入っていただかなくてはなりません。ですけど、借地されていた方や従前から住まわっていた方が、今後どういう希望をもたれているのか、それをはっきりさせることのほうが大切です」世話役たちは地主の参加を望んだが、地主たちが80歳代と高齢であり、住民側の意向確認を固めてからでも遅くないと考え、それは先送りにしようという判断になった。

そこに住まわずして、土地を貸している地主を不在地主という。C南街区の大地主3人は、いずれも不在地主であった。それぞれの地主が自己所有の土地に対して、今後にどのような方策を検討しているのか掌握していなかったし、まだ未交渉であった。

■(小見出し) 地主に会う

柴田とクマちゃんは、8月3日、ある地主を訪問した。JR三宮駅より東へ数駅。国道2号線に近いその住まいは、大地主にしては質素なたたずまいだった。震災の被害をここでも受け、家屋は相当に傷んでいた。生け垣のある門構えの前に立ったのは夕方の5時半だった。呼び鈴で出てきた奥さんにいきなり言われてしまった。

「遅かったですわね。もう来られないのかと思ってましたよ。今度はもっと早く来てくださいね！」叱られたのである。「午後」としか言っていなかったのだ。「呼んできますから、お待ちください」通されたのは、玄関に入って、すぐ左手の洋室だった。壁は、あちこち大きく割れていた。和服姿のくつろいだ格好で現れた当主は、大柄で気難しそうに見えた。

「前にお訪ねさせていただいたときには、みなさんの意向にご協力していただけるということで...」と前置きの口上をクマちゃんが言いかけたところで、「そんなん知らん！ なんやそれ。聞いてらん」と遮(さえぎ)られてしまった。「えっ...」と、しどろもどろとなり、大判の手帳を繰り始めた。柴田はそれを眺めている。沈黙が続いた。「5月8日に市のキッタさんと寄せてもらったんですけど...」「忘れた。そんな3か月も4か月も前のこと、覚えとるかいな」万事休す、作戦変更。

「わたしたち借地している者が集まりまして、共同でなんとかならんものか、もう何回か話し合っているんです」と柴田が受けた。クマちゃんは、この日のために用意したC南街区の地図をテーブルに広げ、「こんなふうには共同再建が出来んものか話し合っているところなんです、こここのKさんが表通りに出て戸建てにしたいとおっしゃるんで、A(地主)さんのお土地と交換させていただいて、こんなふうにならないものでしょうか？」と言えば、「いやや。形が悪い！ 値打ちが下がってしまう」まったくとりつく島がない。若干の世間話のあと、「これからもここに住みたいということで、まあ、みんな頑張ってますので、よろしくお願いします。また、ご報告しますので」と挨拶をし、おいとまを頂戴した。30分程度の会談であった。

*

別途、大地主のBさんには坂本が、Cさんにはクマちゃんが、交渉をほぼ同時にもった。C南街区の人たちが集会を重ね、元の街に住みたい意向をもっていることを伝えた。両者は好意的であったと、世話役の集まりで伝えられた。ただ、Cさんの場合は、ある借家人との間で権利関係問題が発生し、その調整如何ともいわれた。

■(小見出し) 酷暑の相談所

震災から半年が経過した。相談所の窓からは、一面"原野"が広がって見える。かつてここにあった密集した街はもう無い。真昼の太陽は頭上で輝き、日影も作らない。安普請の相談所は、天日にあぶられていた。

村上は、公会堂の前でバケツに水を汲み、歩道を30メートルほど歩き、相談所の周囲に植えられているヒマワリに水をやった。首にタオルを巻きつけ、腕を太くし、その往復を何度も繰り返していた。相談所に水道がひかれたのは、お盆が過ぎてからだった。それでも、「アツイですねえ」と挨拶をする村上の表情から笑みが消えたことはなかった。

被災地に花を咲かせようという運動があり、ヒマワリを主として、多くの種がまかれていた。やせた土地でそう立派でもなかったが、背丈は低いながらも黄色やピンクの花は、相談所をオアシスにしていた。

相談所は、2棟のログハウスを1棟につないだものであった。つなぎ目には簡単な屋根がほどこされていたが、強風と大雨に襲われると、その連結部は いとも簡単に"屋外"と化した。屋内に雨樋をしかけ、地上に導いた。相談所は、まさに荒野の一軒屋だった。

*

被災地は復旧のさなかで、復興は緒についたばかりであった。相談所の中には、白板に予定表が掲げられ、ウル・市・林、それぞれの当番が〇印でしるされていた。週のうち、火・木・土・日の4日間はウルと市が午後2時から7時(土日は6時)まで、林は水・金の午後4時から8時までをボランティアで受け持った。住民にとっては、月曜を除いていつでも相談できる体制にあった。

しかし、実際は、夜間の会議がしばしば開かれ、10時をまわることも珍しくなかった。村上は、夜7時に相談所を出ても、帰宅するのではなく、それから再び本来の職場に戻り、残務をするのが常となっていた。

「家の人は、何も言わないですか?」と、私は尋ねた。

「仕方ないですね。でも、日曜日は、ここに来る前に、子どもをプールへ連れていったりしてますから...」

こんな異常な勤務状態がいつまで続くのだろう。彼らの健康を危惧してしまう。

震災のその日から、人々は思い思いに飛び出してしまった。職務だけをまっとうしておればよいという状態は、どこにもなかった。自分は今何をすればよいかを、自分自身で判断をくだすしかなかった。大海に小舟を漕ぎ出したようなものだ。海図の無い航海。相談所は、目的地を定めずに海に浮かぶ小舟の操舵室のようでもあった。陸地を求めるも風は吹いてこない。

*

相談したいのですが。

どうぞ。

運宮通5丁目のYといいます。

(住宅地図を広げ)

ここです。今は更地に戻しているのですが、近く、建てようと思っているのです。その場合、こここの家ははどうなりますか?

(隣家と細い路地を隔てた向かいの家の2軒を示した。今は更地)

敷地が狭いから、どうされるのかと思ひまして...

わたしとこは表通り面していますから建てられるのですが、もし今の敷地のまま建てたら、ここの人たちは建てられなくなるのではと思ひまして...

(その通りであった。4メートル未満の路地では接道条件が満たされない。この人は良心的にも相談してきたのだ)

建てるのは、すぐですか?

...ええ。

お隣と一緒にというお考えはないですか?〈協調化〉とか、色々方法は検討できるかと思うのですが...

(そうして、近辺のまちづくりの進行状況を説明しながら、相談は続いた)

■(小見出し) 準備会は出来たが...

8月19日、この日も暑かった。夕方5時、公会堂には、C南街区の人たちが寄った。が、出席は30人に満たず少なかった。司会は今滝。「準備会の趣旨説明を、この準備会の発起人の1人である柴田誠一さんにさせていただきます」

小柄な柴田は立ち上がった。メガネをやや鼻にかけ、右手に趣意書をもち、読み上げるように、そして、文章語を語り口的な言葉にときどき置き換えながら、説明をした。

—共同化による復興まちづくりの実現に向けて、どんな共同化を進めていくのか、どのような計画が良いのかについて、自分たちの意見をまとめて作り上げていくことが必要となっています。そのためには、住民同士で話し合い、意見をまとめ、共同化による復興まちづくりをめざす組織、つまり共同化による復興まちづくり協議会の設立が必要です。しかし、今すぐそのような組織をつくるには、まだいくつかの課題が残っています。全員の意向、総意による協議会の設立に向けて、そのための準備が必要です。まずは、協議会設立のための準備会をつくって、みんなの意向を集約し、共同化による復興まちづくり協議会をめざそうというものです。

受けて、今滝が「ご賛同いただける方は、拍手をお願いします」と場内に諮った。もともとがハスキーな声の彼女だけに、精一杯の声をふりしぼっているように思える。大勢の拍手で準備会は発足した。引き続き、会則の

承認を得、役員を選出が行われ、会長に柴田が就任、副会長は藤田・坂本と決められた。ついで、議事は、坂本を議長にして進行された。

なりゆきを見守っていた岩崎は安堵しながらも、坂本にうながされてあぐらを解いた。準備会の今後のスケジュールについて、およその説明をした。場内から、共同化の実現にはどれくらいの時間をみたらいいのかと質問を受け、「今年の年越しそばをおいしく食べよう」と年内には目途をつけられるよう努力したい旨、励ましのメッセージとともに述べた。村上も、祝辞代わりに、「ぬれ落ち葉のように、みなさんにひたひたとくっついていきたいと思います」と述べた。

*

この日、住都公団(住宅・都市整備公団)の瀧一三専門役と小金山光雄参事が集會に初めて参加した。「パートナーにご指名いただいたので、パートナーになるようにします。現在まだ70人程度の復興本部ですが、今後150人、さらに220人まで陣容を増やしていく過程にあります。どうぞよろしくお願いします」と、簡単な挨拶で終えた。

なぜ、住都公団か? 2回の意向調査によって、従前居住者は、賃貸に加えて分譲も少なからずの希望をもっていた。この両者を条件的に満たすには、民間を除けば、事業の依頼先としては住都公団しかなかった。一方、想定されている共同化の規模も、当公団が引き受け可能な規模にも達していた。ウルの事前交渉により、この日の参加となった。

*

8月23日夜、地蔵盆。お地蔵さんを祀るおりんの音が絶え間なく続いていた。チリン、チリン、チリン、……。北陸出身の山内はカメラを片手に、その音色に聞き惚れていた。「僕は初めてです。地蔵盆はありましたけれど、お菓子をもらいにまわるなんて... ハロウィンみたいで、楽しいですね」村上は九州出身。「ちょうちん持って回ることはしたけれど、なんももらわなかったですね。大人は集まって酒を飲んでましたけど...」ニコリ目を細めた。

一斗缶の中にブロックの破片を入れて重石(おもし)とし、それを2つ用意して、それぞれの上に、お釜と大鍋を1つずつ置いた。これを、火鉢の代用とした。"火鉢"には砂が敷かれ、線香が焚かれた。焼けたり倒壊した建物の下敷きになったりして、不足するものが多かった。3体の地蔵は、それぞれに赤あるいは紫の座蒲団を敷いてもらい、赤いエプロンをかけ、赤い帽子をかぶっていた。白い祭壇の前には、畳が6枚広げられ、300人分は用意されているというお菓子の山で、占領されていた。

3体の地蔵さんは、御船通4丁目の、大道通2丁目の、川西通3丁目の、それぞれの町内で、震災さえなければ祀られていたのだったが、今年は地蔵さんの合同慰霊祭になった。地蔵さんが、かつて祀られていた路地や辻を超えて、人のつながりがまた1つ大きく広がっていった。地蔵さんが呼び集めたのは、子どもたちだけではなく、自治会の役員さんや街の郵便局長も招くことになった。そして、山内・村上をまじえ、にわか復興談義にもなった。お菓子を振る舞う女性たちも、それぞれの"我が家"の事情がささやかれているようであった。

帳(とぼり)が降り御詠歌が流された頃には、接待のお菓子はほぼ底をついた。チリン、チリン、チリン、……。おりんの音が心地よい。天上には1番星の木星が輝いていたが、誰も気づく人はいない。50メートル道路が対面にあり、宵信号になるたびごとにゴーッと騒音を上げていく。夜空を見上げる気分になれる環境とは程遠い。午後8時20分、最後のお脂りがあって、その後、その場に居合わせたみんなで片付けた。

村上が声をかけた。「イマタキさん、ちょっと疲れたんと違う」「うん、ずっと炎天下で準備やら色々してたでしょう。ちょっと疲れたね...」珍しく弱音を吐いた。街路に植えられていたイチヨウに、未熟な青い実がいっぱいぶらさがっていた。暑かった夏も峠にさしかかっていたのだった。

*

準備会・役員会 8月26日(土)・初会合

9月2日(土)

13日(水)

準備会・総会 17日(日)・第2回目

総会は月1回と決めていたわけではなかったが、全体集會イコール総会ということで、これまでの早いペースは維持されていくことになった。したがって、役員会は、「次の総会」までの準備の意味合いが強く、短期間で全体の総意を確認しながら共同化への道のりは進められていった。

*

ウルが用意した模型は、絵空事ではなかった。「容積率の許容限度は200%ですが、実際に日影規制など法を守って建てられるのは160%ぐらいです」と、"実際"を表現していた。アンケートを反映させて、希望する部屋の大きさや必要とされる戸数にも対応させ、模型は"修正"もされた。だから、会議のテーブルには、いつも模型が置かれ、役員たちは具体的なイメージを持つことができた。コンピューターは山内の受け持ちで、役員から要望された内容は、次の会議までに間に合わせようと残業を繰り返していた。準備会発足当時の、模型による計画構想は次の通りであった。

準備会発足総会において、無記名による分譲と賃貸の希望戸数を集約したところ、分譲希望が18、賃貸希望が28であった。アンケート結果の希望する住宅の広さを考慮しつつ、建築可能な戸数を算出したところ、総戸数で62戸プラス店舗。これを分譲に23戸、賃貸に39戸と割り振ることができた。広さ別には次の通り。

	1DK	2DK	3DK	4DK	計
分譲		3	16	4	23
賃貸	6	14	14	5	39
					総計 62

役員たちの知りたかったのは、分譲価格であり、家賃であったが、土地の買収価格が大きく反映されるため、ウルはその価格を説明するのに慎重であった。が、「帰れるか、帰れないか、その金額が分からなければ判断のしようがないではないか」と鋭く要求されるようになり、概算であることを強調し今後を約束するものでないと断りながらも、目安は発表するに至った。3DKの場合、分譲で3千万円ぐらい、家賃で8万5千円ぐらいか、というものであった。

■(小見出し) 分譲か？ 賃貸か？

「新婚さんが住むはずやった屋敷の離れに、今、私ら年寄り夫婦が住んでるんですわ。そやから結婚を遅らせてもるとるんです。居づろうてな。周旋屋をまわっても、みんな足下ばかりみて、家賃をつりあげてくるやろ。こまったなあ」

悔しさと憤りがこみあげていた。「ローンもほとんど終わりやったんや。もうラクやなあと思とった。そこへ地震や。なんもかも燃えて... もうなんべんも思うわ。あきらめられへんな」このほか、アルバムを失ったことが無念であった。懸命に働き、子育てをしてきた数十年が、記憶でしかたどれないおぼつかさ。「あんな高かったら、戻ってこられへん。なんとか、ならんのかいな」

こう語る役員の1人は、震災で腰を痛め、それが原因して遠路の通勤は無理となり、定年後も嘱託として勤めていた会社を辞めた。しかし、彼は、会社で部下をいたわってきたのと同様に、年老いた隣保の人たちを親身になって気遣っていた。

「あまり先を急がんと、現状を再確認することから始めてもいいんじゃないですか。家庭の事情も経済的事情もそれぞれに違うんですから」

*

夕方5時は、まだ明るい。夕陽にしてはまだ高度を保っていた晩夏の太陽に向かって、50メートル道路を小金山は歩いていた。焼けこげた鉄骨を放置したままの商店の前を通り、仮設の公会堂前で右に折れた。地下鉄のターミナル付近はビジネス街だが、5分も歩けばそこには人の住む空間が現れた。相談所付近は花盛りだった。計画畑を歩いてきた彼は経験も豊富だったが、あえて白紙で臨んだ。

「みなさんが出来るだけ早く入れるよう最大限の努力をしますので、ぜひご協力ください」

9月2日、被災者たちと初めて膝詰めで話し合うことになった彼は、少し固めの挨拶をした。

「ここら辺りは、オフィスビルが並んでいるかと思えば、ここのように人が住んでいる街があるんですね...」と感想を述べると、それを受けて、「まだ使える井戸があるんですよ。防火水槽に使えませんかね」「へえーっ、そうですか。防火水槽はこの程度では義務づけられていませんが... つけますか！」

「ハンコウ(阪神高速道路のこと)の上は、どうなるの？」小金山は、質問をウルの方内に向けた。「まだ決まってませんけど...」「公害と騒音のことを考えなかったらあかんね。戸数は多いほうがいいんでしょうね」に対して、柴田会長は「たくさん入らんと、やすなれへんでしょう」「どの住戸にもちゃんと陽の当たる家をたくさんつくります」

これまでのウルと住民の協議では、いつも"可能性"を探る話し合いだったものが、公団が参加したことで、にわかに現実味を帯びてきた。

*

分譲価格も家賃も「高い」という意見が圧倒的だった。それで、9月13日の会議では、ウルから、3案ABCが提出された。総戸数は、A案=68戸・B案=66戸・C案=71戸。ABは分譲棟と賃貸棟が分離し、Cは1つの建物内に併存していた。さらに、駐車場の配置において、Aは分譲・賃貸を区分せず共用としたが、Bは分離させた。

今、検討されようとしているのは、従前居住者のための住宅である。それゆえ、アンケート結果を取り入れた計画案になっていた。おおむね地主であったり借地をしていた人は分譲住宅を希望し、借家だった人は賃貸住宅を希望した。この両者を満たす条件として、分譲棟と賃貸棟の2棟を有機的に結びつける案が主体になっていたが、こうした建築手法は、コンサルタントにしても、公団にしてもほとんど未経験であった。個々の住宅や共有部分の管理・償却などをどうするかで、苦心の3案であった。

(役員)「1棟にしてしまうことのデメリットって、なんですか？」

(ウル)「たとえ、1棟にしてしまっても、階段で境にするとか、廊下を隔てるとかになりますね。エレベーターも、分譲用と賃貸用と分けて設置することになるでしょう」

*

(山内)「こんどの総会では、共同化計画案を作成していくにあたって、どういう方向で計画を立てていくのかを相談することになります」

(役員)「命の次に大事なものは、金や。その金額については出してやってほしい。でないと、条件に対して判断できない」

(山内)「数字が言えるほどは、まだ詰められていません。また、数字を提示しても、とまどうだけではないですか」

(役員)「せっけんやキャラメルを買うわけじゃないのだから、高い目に示して、アバウトでも出してほしい。借家人が心配しています。入れるのかどうか。今後の総会出席者を増やすためにも数字を出してほしい」

(山内)「少し幅をもたせた形で、言いましょうか...」

(役員)「コンサルで試算したら、こうだ！と、やってください」

(小金山)「分譲棟を作る場合、18戸は少なくともいりますね。土地代を含んだ価格帯を示すにしても、世間よりも安いものでないと... 大丈夫ですかね? 10月初めには、公団からも土地代を想定して目安を提示できるようにしたいですね。そのためには、みなさんの協力がぜひとも必要です。年内に計画をまとめようとしたら大変ですよ。これからは、丁々発止になりますよ」

*

9月17日、風強シ。台風12号が房総半島沖をかすめるように北上していたからだ。準備会としては第2回目の総会に当たるこの日、定刻の2時前になると、続々と人は集まり始めた。

役員は集まり具合を気にしていた。1人でも多くの出席者を増やすため、事前に電話するなどして"説得"にかかっていた。

(住民)「家賃、高いんやろ」

(役員)「補助もあるし... 他よりは安いんや。なんぼやとは、ボクもよう言わんけど」

(住民)「ほな、ハナシ、聞イといてエな」

(役員)「そんなんアカン、住む気があるんやったら、あんたが行かんとアカンのや」

(そして、役員どうし)「戻る気が有るのか無いのか、こんこんと言うたんやけど、アカンなあ。息子が金平町(きんぺいちょう)に住んでいて、もうそこに住みたいやなあ。もう、しゃあないな。トシやいうけど、トシ、関係ないねんけどなあ...」

*

参加者は30人程度だった。この日の総会は、ABC3案の説明に終始した。壁面には、敷地平面図が3案各1枚ずつ貼られ、それぞれに対応させた模型は、長机に並べられていた。この計画案はウルの作成であったため、山内が説明をした。

1DKから4DKまで各タイプ別に、目安になる程度の絵も貼り付けた。こうした"DK"と呼ばれるような住宅に住んだことのない人が多く、関心はむしろこちらに集中していた。「1DKと言われてもわからないのですが」「45平米ぐらいです」「坪で言うてくれませんか?」「ええっと、13、14坪ぐらいですか」「1DKいうても、広いんですね」と、まあ、こんな調子。

分譲価格や家賃の目安を提示するからには、補助金の入り方を説明する必要があった。「〈住市総〉という整備事業によって国からの補助がつかますが、分譲と賃貸とで補助の入り方が違います。賃貸の場合は、敷地そして建物全部に最大で3分の2の補助が入りますが、分譲の場合は、廊下・エレベーター・水道・ガスなどの共有部分だけになります。賃貸の場合は補助による効果が大きいです、分譲は少ないと言わざるを得ません。そして、その金額ですが...」と、説明を続けた。3案の家賃の差額は5千円ずつ程度で、分譲では若干の差でしかなかった。「高い」という印象はぬぐえなかった。

■(小見出し)「戻る意思はありますか?」

復興・再建への歩みは、すでに住民主導になっていた。しかし、総会に出席しない住民は、役所がしてくれていると思っている人が少なくなかった。誰が実行主体なのかの見極めすら自覚がなかったというほうがより正確かもしれない。戻る戻らないの判断は、建物が出来てから、家賃や分譲価格を訊いてからでいいと鷹揚なものである。繰り返されるアンケートは、その事前調査ぐらいにしかとらえていない。借家人であったならば放り出されたも同然で、自分に戻れる権利があると考えられなかった人もいたし、その権利を伝えるだけでも大変な作業であった。そして、今、検討されつつある建物は、「従前居住者」を特定し、その人たちのためだけに建てられるのである。したがって、従前に住んでいた人のおおのが、戻るか戻らないかの意思を自ら意思表示し、かつ、どのような住居形態を希望するのか主張しなければならない。

*

役員会 9月22日(金) 29日(金)

10月3日(火) 7日(土) 14日(土) 19日(木)

準備会・総会 22日(日)・第3回目

準備会への参加届、過去2回のアンケート、住宅地図、クチコミで集めた情報などを元にして、住民名簿が何度も"改訂"されていた。10月12日付には165人の名前が記載されていた。この名前は家屋または世帯を表すもので、同居家族の名前などの重複はさけられていた。役員会では、個人ごとの総チェックを何度もしていた。

「この人は戻るというてる」

「この人は初めから自分で建てるというてたな」

「帰って来んのと違うかな?」

(同席の役員の箇所にもわってきて...)

「あっ、Fさんや。どうしはります?」

「わからんなあ...」と、半分は本音で答えて、笑いを誘った。

(役員はそれぞれ、隣保を分担して連絡をとりあっていた)

「まだ、連絡中です。すみません、なかなか連絡とれないんです」

「えらい、怒られてな。今、何時や思とるって... いうても、夜のまだ8時やでえ」

「ああ、あいつはヘンコツやねん。あの震災のとき、梁(はり)が親爺さんにドーンっと乗っとなや。こっちで持ち上げたら、痛いやないかって怒鳴りよったわ。痛いのんぐらい、辛抱せえ! ってな、言うたぐらいや」

「準備会に参加すると返事もらいました」

「この人、ここに載っているけど、震災前に亡くなっているよ」

「この人も、震災前に引っ越していました」

百メートル四方の小さな街区で、しかも10人を超える役員が手分けしても、行方の分からない人は、名簿を何度改訂しても消えなかった。

ところで、準備会では、「参加届」を出し、千円の会費を払うことで、その共同化への参加の意思表示としていた。この参加届は、半数を超えていたとはいえ、全員合意を原則とする共同化再建のためには、さらに参加を呼びかける必要にせまられていた。前回の総会前にも、電話作戦を試みたが、若干の成果ぐらいでしかなかった。

そんなとき、役員1人であった中西博美は、個人の発案で、マンガ的な押し絵を入れて、わかりやすい呼びかけをしたが、これは好評だった。

*

「ほんまに、どうしたら人が寄るやろか」

「トイレをなんとかしてあげなあかん」(トイレは仮設用のままで、女性には不快だった)

「お茶が出たら、ホンネが出るやろか」(ということで、次回総会後に茶話会をすることにもなった)

しかし、役員たちの苛立ちも鬱積していた。頻繁に会議を重ねる疲労感があり、風邪が流行り始めるなど体調も思わしくなく、それは、ウルの山内、市の橋田・村上らにとっても同様だった。

会長の柴田は「宙ぶらりんなのが困る」と言いながらも、「ブルドーザ作戦でいこう」と、声の意気を強めた。「しんどいけど、もう一固めしよう。あとで、どんでん返しにならんように...」別の役員も「半歩ずつでもしやあない。下がりもってでも説明していかなあかん」なりゆきを見守っていた小金山が、「この人たち、確かに入れるんだらうな！ 頼むよ！」と、橋田に言葉を向けた。

相談所には180×120センチのテーブルがあった。小さな丸椅子に大きな尻をのせ、互いに譲り合っても、10人以上が座ればかなり窮屈になる。時計の針が夜9時半を回ると、さすがに疲れてくる。帰路に1時間近くかかる役員もいた。女性もいた。市の職員は、もう一度、職場に戻ることをさえあった。筆者のクルマで帰宅した役員1人は、「同じことばかり繰り返して。ホンマに建つんやろか」と、真情を吐露していた。

■(小見出し) 共同化計画の準備会案できる

共同化に協力するあるいは参加するということは、共同住宅に住むという狭い解釈ではない。C南街区では、共同化が予定されている敷地内に、戸建てを希望する権利者がいた。共同化実現をめざす中、ウルや市当局の調整で、戸建て希望者の権利を守る協議も一方で行われていた。その解決は、土地の入れ換えしかなかった。

C南街区の西北部は当初より戸建てゾーンとして共同化から分離されていたが、この頃、北側一筋を新たに戸建てゾーンとすることで結論を出すに至った。共同化を推進する側としては、道路に面するのが東側1面だけとなり、また敷地もやや狭くなったということで残念なところもあるが、むしろ戸建て希望者が共同化に協力して敷地の移動を承諾したからこそ、共同化はより実現への道を辿ったといえる。ここにおいて「東ブロック」と呼んできた部分呼び変え、北側を「個別建築ゾーン」とし、残った部分を「共同建築ゾーン」とした。ゾーンの名称に「共同」の文字を使ったのはこれが初めてで、つまり、敷地の観点からは、共同化の範囲がほぼ決定づけられたといってよい。(この「個別建築ゾーン」は、震災直後より協議中であったが、共同化の範囲を絞り込むことができず「東ブロック」としていた。9月17日の総会で提案されたABC3案は、この「共同建築ゾーン」の範囲内で計画されていた。"公式"には、10月10日付のまちづくり通信『ひまわり』8号で、これらの名称が初めて使われている)

*

10月22日、晴れ、第3回目の総会。午後2時9分に開会された。「これだけ大勢の方に集まっていたいで...」と会長・柴田の挨拶のように、公会堂は今までの最高の入りだった。暖かい日でもあったが、場内2機のクーラーが熱気のため運転されていた。参加者は、50人を超えていた。

総会に先立つ同3日、第3回目のアンケート用紙が配布され、その集計結果は、この日に発表された。アンケートが返ってこない住民に、電話で再度アタック。役員たちは、この日の総会になんとしても人を集めようと頑張った。

アンケートによる意向調査は、おおむね次の3点に集約できる。

- ① 準備会に参加する意思の確認
- ② 個別再建か共同再建か
- ③ 計画3案のいずれを選択するか

共同化をめざす人にとっては積極的回答者に成り得たであろうし、個別再建希望者にとっては、調和のとれたまちづくりを求める回答の機会になった。「分譲住宅の価格が希望より高くなった場合」「住宅の広さで希望を変えるならば...」などの回答も求め、より実現可能な計画を立案するための用意周到な問いも設けられていた。そして、店舗についても、住宅とほぼ同様の質問が設けられた。

結果、準備会への参加状況は、全体では61%だが、東ブロックについては78%の高率に達していた。これは、共同化が最小限その敷地内権利関係者の合意が必要であることを考慮したとき、参加を即、共同再建と結びつけられないにしても、共同化を実現させるには80%以上の参加が必要としていた役員会の目標に、ほぼ近いものであった。

共同再建は回答者の68%が、個別再建は15%、判断を保留している人が13%の割合であった。

また、前の総会にも提示したABC3案については、C案が回答者の43%と最も高い支持を受けた。C案と

は、1つの建物の中に分譲・賃貸を併合させたタイプで、住宅戸数が多く、家賃負担の軽減や土地の有効利用などの点で受け入れられた。個別建築ゾーンに対する日照条件が良いとした理由もあげられていた。B案は21%、A案は5%であった。

これらの結果を踏まえて、藤田は場内に踏んだ。「今後、具体的な条件について検討をしていくのですが、このABCのうち1つに絞り込んでいった方がよいと思います。そして、それをC案を中心にして、ほかのA案・B案の良い所を検討するなどしたいですが、それでよろしいでしょうか？」 多数の拍手で受け入れられた。

閉会宣言が午後3時22分。その後、「茶話会」がもたれた。が、「会場離れ」が早く、残ったのは1つの隣保だけで、ちょっと寂しかった。

*

役員会	11月4日(土) 15日(水) 22日(水)
勉強会	12日(日)
準備会・総会	26日(日)・第4回目(最終)
役員会	11月26日(日)総会后

共同建築ゾーンがほぼ固まり、懸案の共同化像はC案と決着をみて、役員会は1つの峠を越したようであった。今後は、まだ意向確認のとれていない人への詰めを残すのみとなった。

そこで、「勉強会」をすることになった。テーマは「借地権」。講師はウルが斡旋紹介した不動産鑑定士の上田節夫氏。地主が土地を公団に売却すれば、その後、借地人には「借地権割合」と称される権利金の配分を受けることになる。それを今から勉強しておこうというものであった。

共同建築ゾーンで借地をしていた約8割、17人が参加した。民法と借地借家法／借地権とは／借地権の対抗力／借地権価額...とレジュメにしたがって、「講義」は2時間ほどであった。法律用語が続出し、けっして易しいとはいえなかったが、地代を払い続けている限り借地権は存続するとか、借地をしている人の権利が守られていることを聞かされ、一様にホッとしていた。

*

準備会への参加状況は、東ブロックに限れば、45人まで達し、一方で行方の分からない人や戻ってこない人を合わせた12人をブロック内総数65人から差し引いた上で参加率を求めれば、85%になった。これで目標の80%台はクリアした。

C案については、駐車可能台数が数台増えた程度で特に大きな修正もなく、11月26日の第4回総会で「準備会案」として成立した。そして、次月に予定されている総会で、準備会を解散し、いよいよ協議会へ移行するスケジュールが承認された。

こうして準備会の成果は一応の到達点に達したかにみえた。前月のようなせわしさもおさまり、相談所も平穏だった。が、共同化像が鮮明になった分、共同化に加わらなかった部分もあぶり出されてきたのだった。山内と村上は気にかかっていたが、いつ切り出そうかとその時期を迷っていた。

総会を終えたその日、場所を相談所に移し、役員会を行った。いよいよ協議会結成に向けて条件整備にとりかかるのである。協議会では、計画される共同住宅に入居資格がある者、土地になんらかの権利をもつ者が必要条件を決議していくことになる。そのためには、誰にその資格・権利があり、誰にそれが無いのか、その見極めは避けて通れない。

山内が重々しく発言した。「敷地内のみ入居資格があるんです。隣接部分の人には入居資格がありません」予想した通り、役員たちにショックが走った。村上も山内も異口同音ながら説明を続けた。その説明のすべては、これまで幾度となく話し合われ、役員たちもよく理解できていたことばかりだった。

(役員A)「分かりました」

(役員B)「Aさんは簡単に分かったというけど、おれはよく分かん。間違っていたと思う。(おばちゃん、入られへんねんや)と、山内さんのいうように、簡単に言われへん。準備会に入っているということが入居資格を与えると、条文に入れてはどうですか」

(村上)「それは、出来ません」

第8章 共同再建の果実

役員のBさんは、震災後、法務局で登記を閲覧していた。その時点で、○さんは無理だな、△さんも無理だな、□さんは建てられるかなと思っていた。「入れたって欲しい。アカンのかいな、こういう言い方は...」 Bさんは無念であった。

○△さんは、共同化協議のほぼ当初から分離されていた戸建てゾーンの中に住んでいた。その戸建てゾーンでは、師走に間に合わせたかのように、早くも生活を再開させた戸建てもあったし、建築中の戸建てもある。が、○△さんの場合は敷地が狭く、再建は難しい。共同化に敷地として協力しようと思っても、両隣とも再建予定であり、敷地が狭小なため土地交換の対象にも成り得なかった。しかたなく、敷地は別だが、隣の同じ街区で進められている共同化の準備会に参加届を出して、その成り行きを見守っていた。

「初めから敷地として(共同化に)入れる見込みがなかったんだから、準備会に誘うのが間違いやなかったですか。それでも、C南街区全体が対象やとウルがいうから(準備会に)入ってもらった」

「(共同住宅に)入れるかもしらんと、はっきりそう言うて準備会に参加届を出してもらると。どう言うて、あやまるねん」

*

マンガ的な挿し絵で呼びかけたその中でも、「それから元大道通3丁目や御船通4丁目に住んでいた人なら優先的に入居できることをまだ知らん人がいたら教えてやってな」というくだりがある。必ずしもそうではなかった! どうしてこんな行き違いが起きたのか。

そこで入居条件を整理してみよう。計画中の共同住宅は、国の補助を得て建設される「従前居住者用住宅」である。まずは、この住宅を建設することによって住宅を失うことになる人たちが優先の第1順位となるが、C南街区の該当敷地内はすべて焼失して家は無い。したがって、従前、そこに住んでいた人たちがこれに該当する。また、共同化を進める過程で土地を交換するなどして敷地内に権利が移転した人も該当する。

さて、ここC南街区には、震災とは別に、特殊事情が1つからんでいる。それは、大道通3丁目の大部分が、阪神高速道路2号線延伸計画によって立ち退きが決定していたことだ。この立ち退き者用受け皿住宅の確保の必要性から、大道通だけでなくその周辺部分も含めて、都市計画事業の1つである住宅市街地総合整備事業(略して住市総)の網がかけられていた。国の補助金は、この住市総によって交付される。言い方を変えれば、震災より前に2号線問題があり、それによって国の補助を受けられる根拠が発生し、今、共同化の計画が進展しつつあるともいえる。ということは、2号線建設による立ち退き者の受け皿住宅であることは明白で、これが優先順位の2番目となる。

さらに、住宅が余れば... 市当局は、ここで全市的な一般公募だと主張する。しかし、橋田はニュアンスが違う。震災復興の地域指定である「重点復興地域・大道周辺地区」を一般公募との間に入れることも検討したい旨の含みを、発言にもたせている。地域のコミュニティを守るために、地域の人たちを分散させることのないよう要望している自治会役員たちの意見に耳を傾けようとしている。が、結論は出ていない。結論を遅らせていることが、混乱を招いているといえないことはない。が、一方で、結論を急げば、論拠を立てることが出来ず、一般公募となりかねない。

*

問題点は、さらに錯綜する。「C南」という街区名称は「重点復興地域・大道周辺地区」を8メートル道路で単純に仕切ったに過ぎない。町名・丁名ならば区切り様も別にあった。しかし、そこに建築物を構築することが主体である(まちづくり)という観点からは、道路で仕切ることに合理性はある。が、「御船通4丁目」は道路を越えて、C北街区の一部も含まれてしまう。「C南」という呼び方は、震災後、便宜的につけたのであるから、元の住民で誰も知る者はいない。だから、「御船通4丁目に住んでいた人は」と呼びかけ表現して、それで誤解を生じさせても、その責任はどこまで問えるだろうか。

C南街区は北東の角1棟を残して、すべて焼失した。建築基準法による接道条件を満たさず、また狭小宅地が多い中で、事実上の再建不能となる被災者が続出するであろうと容易に予測できた。それを救済する方法は、共同化が最も有効と考えられた。「マンションは嫌だ」「すぐにも住宅が必要だ」「待てない」などの意見も声高に出されて、共同化をまとめるのは難しかった。しかし、可能性の網は、最初は大きくかぶせたい。権利関係を調整するのだから、多少の反対ならば、時間をかけて納得ゆくまで待ちたい。そうして出来た計画は、当初の網よりは狭くなる。したがって、網の外に出てしまう事例も出てくるだろう。網の中にとどめておいた間の話し合いが、結果としては、裏腹になったかもしれない。網の外に出てしまった以上、優先順位には入れてもらえない。

さて、この入居条件の検討のために、一言付け加えておきたい。専門家はさておいて、震災前まで安穏と暮らしていた住民が突如として家を失い、復興とやらで共同化を提案されつつも、その計画成就までのプロセスを誰が予測し、理解できるであろうか。協力を依頼されても、どのように協力し、いつまで辛抱すればよいのか。国・市など行政にその不備を指摘するしかない。でなければ、住民(被災者)は救われない。

■(小見出し未定)

役員会 12月2日(土) 6日(水) 15日(金)
協議会・総会 17日(日)・設立総会

12月17日、震災からちょうど11か月目に協議会が結成された。正式な名称は「C南街区共同化による復

興まちづくり協議会」である。共同住宅を建てるための"組合"でもあるが、共同住宅を核にC南街区のまちづくりを検討し続ける協議会でもあった。

前回成案となった共同住宅の「準備会案」は、この総会で「協議会案」として"昇格"し、正式に住都公団へ事業申込みがなされた。公団の小金山は次のように語ったが、それは決意表明のようでもあった。—これからは大変な作業が始まります。産みの苦しみは覚悟しています。協議会の方も、全体として協力していただけることを望みます。年内には大地主と売却代金の折り合いをつけたい。1月中旬には、公団の案を提示したい。3月ぐらいには、だいたいのことを解決させたい。

閉会を宣言する前、準備会に引き続き協議会の会長に選ばれた柴田は、あやまった。「従前居住者にしか権利がないということがはっきりして、それに該当しない方にお詫びいたします」と。

*

正式に事業は公団に委ねられたが、8月19日の準備会発足のときから、公団の小金山と住民とは二人三脚であった。そして、いつしか「平成9年の12月には入居出来るように頑張りましょう」ということになっていた。それから、4か月が経過し、小金山はすでに辛酸をなめていた。

「協力するということと協力しないは、同意語ですね」小金山の役員会に対する静かな抗議であった。地主も協力的だからと言われて、ある地主に会ってみると「売らない」と驚かされた。何度足を運んでも埒(らち)が明かない。年の瀬も押し詰まった12月26日、柴田ら住民4人は地主の1人と会った。再建計画を住民みずから説明することで協力を求めた。明けて1月18日、地主は売却に同意した。

敷地内の会社が土地の交換を急ぐよう迫った。たとえ1区画でも共同化予定敷地に建物が建ってしまうと、計画そのものが危くなる。市当局に土地の交換を急がせねばならなかった。

共同化の趣旨をよく理解していない地主もいた。狭い敷地ながら建てると言い続けていた。全体計画を示し、協力をやると得る。さらには、地主と借家人との間で争議があり、調停中であった。2か月に1日だけの調停で継続中。

これらの案件をひとつひとつ解決して、共同化への条件を整えなければならなかったが、ひとつ克服するだけでも相当な忍耐が要求されたのだった。

註(2012.1.2) 以下、取材メモ

分譲希望者への個別? 集団? 面談 - 「あきらめえ」というようなもんや

オール賃貸に決まる

なぜ市営にならないのか?

役員会 12月21日(木)

役員会 1月11日(木)

2月? キャナルタウンの見学をしている

インフルエンザの大流行

坂本10月22日、鹿子台に引っ越し

描く建築像など

用地高

C南街区のまちづくりにこだわって

寒い春

換地・後にひけない計画

勇敢だが、危険な選択

先行ボーリング

いつまでたっても、おんぶにだっこ

店舗を認めた公団

4月の組織換え

共同化を決定しつつも、同意づくりに苦慮するありさま

風邪が猛威をふるう

役員たちの引っ越し ダブルローン

ラーメン屋、開店

1月2日、午後6時すぎ、まち相に寄ると山内がカーペットにうつぶせになっていた。

終章 自立とは

註(2012.1.2)

以下すべて取材メモ

C南の共同再建／まーぶるおおみち／大道周辺地区の復興

これらから、何を学びとれるか？

まちづくりを、建築家や都市計画の専門家でなく、

市民のレベルで検討してみたい。

そのためには、これらに関係した人たちの、自由討議を行い、そのテープ起こしを編集したい。

そのときのテーマは、

案：① 震災で失ったもの、得たもの

② 暮らしに必要なものとは、何か？ (モノ・人)

③ 住みやすい建物とは？ 建物に望みたい機能

④ 住みやすい街とは？ 街に望みたい機能

⑤ どんな明日の暮らしが描けるか？

⑥ 自立とは？

小金山光雄さん

東京・練馬に住む。

家族に、もう大反対された。

頼む！ 行かしてくれ。2年だけやらして欲しい。

当時 21才の娘(大学2年)、18才の息子(浪人生)がいた。

1月26日、徳島から高速艇でハーバランドに入った。

危険度判定を三宮で3日間、担当した。

以前より出て行って欲しかった借り主を追い出すために、赤紙を貼れというもおった。

ある家で80才ぐらいの夫婦がいて、おじいさんは手前の部屋に、おばあさんは奥の部屋にいた。奥の部屋の柱は折れていた。水道が破裂して畳がピシヨピシヨだった。それで濡れてないほうにコタツを移動させて、じっとしていた。

ここは危険だから、避難所に行きなさいとすすめると、もう避難所は嫌だと、戻ってきたのだった。

「生きてたってしょうがない」というですね。小金山は涙を禁じ得なかった。年寄り夫婦の語ったその声が耳から離れないのだろう。語るその表情も険からぬぐい去れないのだろう。部屋の匂い、空気の冷たさ、その無念が我がことのように思えてならなかったのだろう。この家もこの建物も、判定という仕事を超えて、人の営みの業を知り、赤色の、黄色の、緑色の張り紙を自分の身に貼り付けていく作業だった。

おばあさんの前に赤旗が置いてあったからね、電話帳で番号を調べて共産党に電話したんですよ。あんたの読者が危険な所にいるから見にきてやっつと。

近所の人にも頼みました。ここは危険だから、避難所のほうに連れて行ってやっつと欲しいと。

そうしているうちに、こっちを向いて一人立っている人がいてね、もしやと思ったら、家主でした。それで面倒を頼んで後にしました。

小金山は、1988年8月から3年と10か月、世田谷区に出向して、密集地区の再生事業・太子堂のまちづくりにかかわるなどの経緯があった。全国の住宅密集地域を視察していたなかで、神戸の密集地域にも、かつて足を運んでいた。「密集地域として興味がありました。いずれ声がかかると思っていました。今、行かんとね」5月末、辞令をもらい、神戸の復興本部に着任した。

彼は、すぐさま、三宮の年寄り夫婦のいた場所まで足を運んだ。「どうしてたと思います。平屋のプレハブが建っていたんですよ」その建物だけを見て、彼は戻った。

9月初め、C南街区の人たちと初めて顔を合わせたとき、「あの明るい雰囲気感動しました。これならやれそうだと、そう思いましたね」彼の神髄は、この一瞬で説明がつく。住む人のためにこそ建物がある、まちがある。目が潤む。精一杯を尽くす人である。

註 2012.1.2

本稿は未定稿です。

しかし、今となってはこれを完成させることはできません。

私の手許に置いたままにしておくのは取材させていただいた方にも申し訳なく、公開することにしました。読み直せば、当時より間を置かずして公表したい部分もありますが、私の力の及ぶところではありませんでした。

あれから15年。

入居後、公団の家賃が高い！と相談を受けたこともありました。

年金生活では払えないと。

みなさんは今どうされているのでしょうか？

気懸かりです。

神戸の震災で私は『明日の町へ』(1995年)を上梓した。そのきっかけは、友人・林英雄がつぶやいた「自立建築」という言葉だった。林さんが住んでいた長田のまちの復興をいつしか手伝っていた。私の本来の仕事(ヒントボックス)が壊滅状態だったから。『まち再生』は1996年の12月頃で私の取材が途絶える。それは、私自身が仕事を探さなくてはならなくなったからだ。

1997年1月、長田の産業、ケミカルシューズを専門に扱う流通倉庫に勤めることになった。朝8時前に家を出て、家に帰るのは夜8時だった。それから、まだ多少は生きていたヒントボックスの仕事を夜遅くまでしていた。こんなことがいつまで続けられるのか?と思うほどの過酷な時間だった。

1997年9月27日、ヒントボックスは朝日新聞大阪本社版で取り上げられ、その記事の評判が良かったことで、10月1日今度は全国版に掲載された。朝日の全国版は海外でも読まれていて、ヒントボックスは一気に全国展開と一部の海外へとお客さんを広げた。つまり、奇跡の復活だった。(流通倉庫の通勤は1年足らず、同年12月末で辞めた)

長田の焼け野には「ルネタウン御船」と名付けられた復興住宅が建った。私はそのオープンに招待されたけれど、ほとんど記憶がない。それは、取材を続けられなかったこと、最後までお手伝いできなかったことの後悔があったから。

それから、公団家賃の負担をなんとかして欲しいと相談を何度も受けた。受けたけれども、私には為す術がなかった。それも辛かった。後ろ髪を引かれる思いがする。みなさん、しあわせなんだろうか? あれで良かったのだろうか?

みんながまとまって、もとの場所に住めたのは良かったのだろうと思いたい。ルネタウン御船の誕生は奇跡と言ってよいかもしいない。しかし、ドラマだけを生んで、実際に住んでみたらどうだったのだろうか?

「後悔」という言葉は私にはなかった。

失敗が自分の責任に基づくものであればそれを認めることに私は潔しとしてきた。相談事を受けて相手が「後悔」と思うことでも、私は前向きに考えるようアドバイスするのが常だった。つまり、自分のことであっても、他者であっても、私には「後悔」という言葉は無用に思っていた。

ところが、今滝さん(『まち再生』(5) 第6章に登場)は先日(2012/01/07)、十数年ぶりに出会ったその日、私と顔を見合わせて何度「後悔」という言葉を口にしようか? その後悔とは、みんなで共同住宅を作ったことの是非を問うているのだった。あれだけ苦勞をして、復興住宅が完成してみんなが戻ってきたときはあれほど喜んだのに、なぜこんなことになってしまったのか! 無念でならない。あのとき一緒に苦勞した人たちはほとんどもう居ない(ほかに移り住んだ)。一人は亡くなった。そして、今滝さん自身も今また市から転居(借り上げ復興住宅の期限による転居)を促されている。

私の耳に飛び込んでくる「後悔」は取り消すことの出来ない歳月だ。励ます言葉も見つからない。冤罪で失った人生を取り戻せという訴えに等しい。17年前の私の行動は間違っていたのだろうか。そんな初めての後悔の念が今私に渦巻いている。